紀　　要

第　27　号

2014．3

公益財団法人滋賀県文化財保護協会

滋賀県の有舌尖頭器

―松原内湖遺跡出土事例をてがかりにして―

加　藤　達　夫

1. はじめに

滋賀県域の有舌尖頭器の研究は、四出井晴子氏の資料紹介に端を発する(四出井1970)。その後、西口陽一氏が近畿二府四県の有舌尖頭器について集成をおこない、系譜と特性に関する考察をおこなった（西口1991)。この研究で作成された地名表・形式の設定・分布図・編年案がその後の近畿地方における研究の基礎となった。進藤武氏は滋賀県の有舌尖頭器を含む石槍について実測調査をおこない、縄文時代草創期から早期にいたる刺突具の系譜に関する考察をおこなった(進藤1995)。2002年には、関西縄文文化研究会のシンポジウム「縄文時代の石器―関西の縄文時代草創期・早期―」資料集において近畿二府四県と愛知・岐阜・三重および福井県まで範囲を拡大して、府県別に当該期の石器について資料の集成をおこなった。その中で有舌尖頭器の集成もおこなわれ、情報を共有したうえでいくつかの考察がこころみられた(関西縄文文化研究会2002)。川合剛氏は近畿・東海地方の有舌尖頭器について概観し、石材・形態・法量別に分布傾向を考察した（川合2002)。田部剛士氏は草創期・早期の打製石器に利用された石材について府県別に検討し安山岩系とチャート系の２大別７地域のまとまりがあるとした(田部2002)。鈴木康二氏は、滋賀県の縄文時代草創期・早期の石器と遺跡について集成作業をおこない概観した(鈴木2002)。

その後、滋賀県では発掘調査により有舌尖頭器の出土例が増加している。平成24年度の東北部浄化センター造成工事に伴う、松原内湖遺跡の発掘調査において、凝灰岩もしくは溶結凝灰岩(以下、凝灰岩系と記載)と思われる有舌尖頭器が出土した。滋賀県では凝灰岩系の石材を利用した有舌尖頭器はこれまでに報告されておらず、当該地域での石材利用を考えるうえで重要な資料であると考えられる。そのため本稿の主たる目的は、本報告前であるが、資料紹介をおこなうことである。また、あらためて集成作業をおこない、地名表・石材別分布図を作成するとともに、石材に関して若干の検討をおこなった。

2. 遺跡の概要(図1)

遺跡の位置　松原内湖遺跡は、滋賀県彦根市松原町地先に位置する。遺跡は佐和山(232.5m)の西麓に刻まれた谷底に立地する。佐和山は湖東平野の北端にある湖東島状山地のひとつで、南北約４㎞、東西約１㎞を測る。湖東島状山地とは湖東平野に点在する島状の小山地の総称である。佐和山を含め、この付近の小山地は鈴鹿山脈と同様に古生層・中生層のチャートや泥岩を基盤岩とする。佐和山の北には入江内湖、西には松原内湖がかつて存在したが、現在は干拓により農地に転換されている。東には鳥居本低地、南には芹川が形成した扇状地が広がっている(滋賀県1986)。

調査の概要　東北部浄化センター造成工事に伴う発掘調査はこれまで３次にわたりおこなわれた。第1次は昭和60年～平成３年度、第2次は平成12年～ 14年度、第３次は平成18年～ 20年度である(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県教育委員会2011a)。縄文時代から近世までの各時代の遺構・遺物が検出されている。平成24年度の発掘調査では旧河道・ピット・柱穴・溝・土坑などが検出され、遺構・遺物は現在整理作業中である。

これまでの調査で本遺跡では縄文時代早期末から晩期まで活動の痕跡が残されているが、草創期の遺物や遺構は今のところ認められていない。本遺跡周辺の、磯山城遺跡(463-040)、入江内湖遺跡(463-044)、入江内湖西野遺跡(463-043)、六反田遺跡(202-079)を含めると六反田遺跡から有舌尖頭器の出土が報告されている。したがって、本遺跡周辺での草創期の活動は一過的だったと考えられている(滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2013a)。

3. 出土した有舌尖頭器について(図2・3)

出土遺構　有舌尖頭器はT2のS02040(図2)から出土した。S02040は標高91.0 ～ 91.1mで検出された土坑で、長軸約1.0m・幅約0.7m・深さ約20㎝を測る。有舌尖頭器は埋土上層から出土した。この遺構からは有舌尖頭器(図3)の他、２枚の板材が出土した。本遺構からは、有舌尖頭器以外に時期を特定できる遺物の出土はなかった。隣接するＳ02041からは、陶器の破片が出土している。また同じT2で検出されたS02031からも板材が出土している。この板材の下から陶器片が出土している。これらの遺物の年代から今のところ、S02040は中世(16世紀代)の柱穴と推定されている。したがって本資料は、当該期の遺構に伴わない遊離資料と考えられる。本遺跡は現在整理作業中であるため、遺構の所属時期・性格等は報告書を待ちたい。

法量と形態　先端と基部末端は折れており、現存する最大長は78㎜、最大幅は23㎜、最大厚は７㎜、重量は10.1ｇである。復元長は約130㎜で、細身で長い形態である。側縁は両側縁ともに直線的で、先端に向かい収束する。基部は逆三角形で、逆刺は不明瞭である。ほぼ左右対照である。断面形は凸レンズ状である。

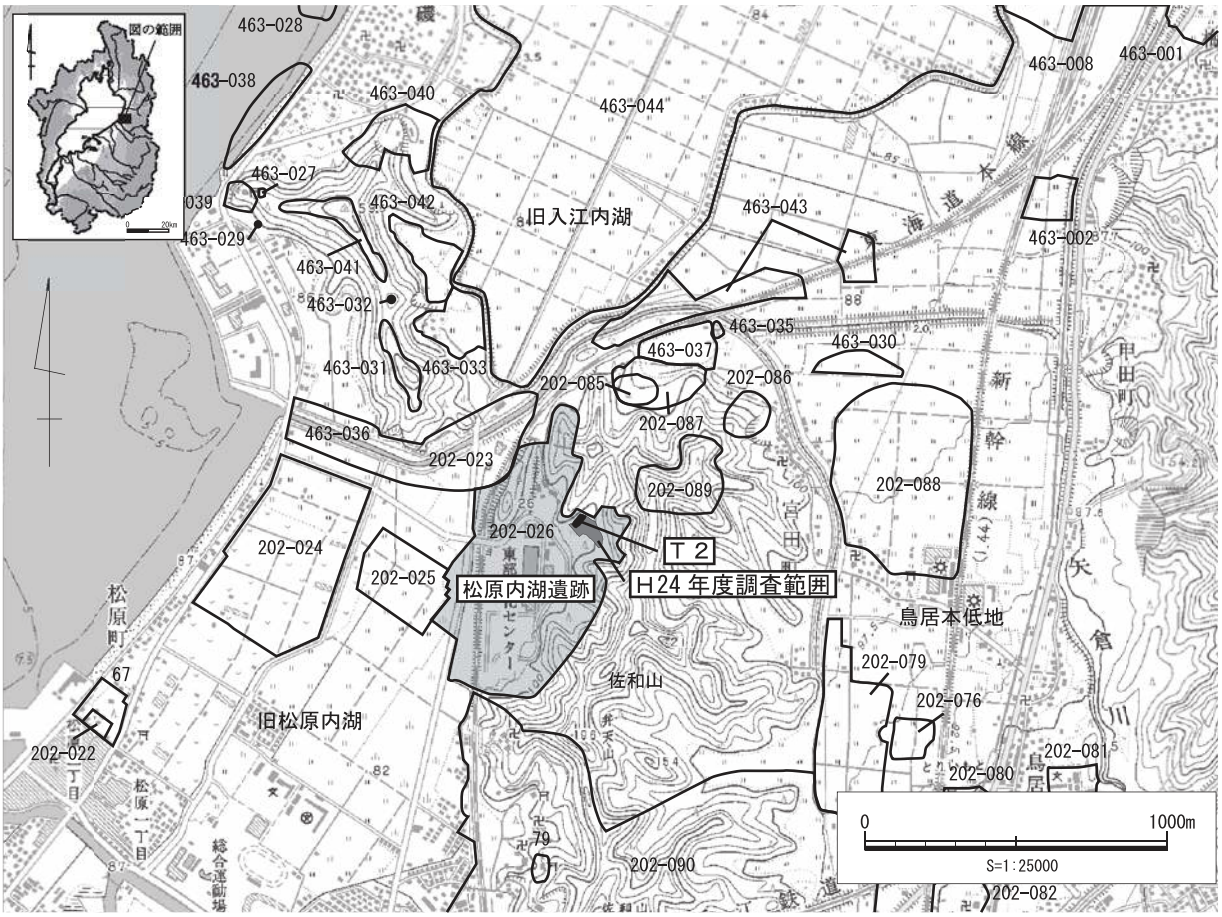

図１　松原内湖遺跡の位置・松原内湖遺跡調査地点位置図

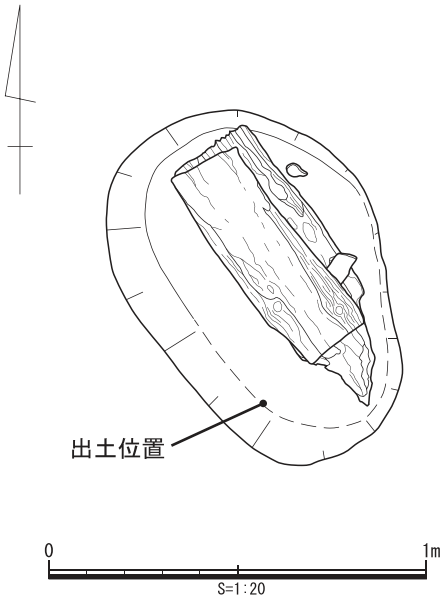

図２　S02040 平面図

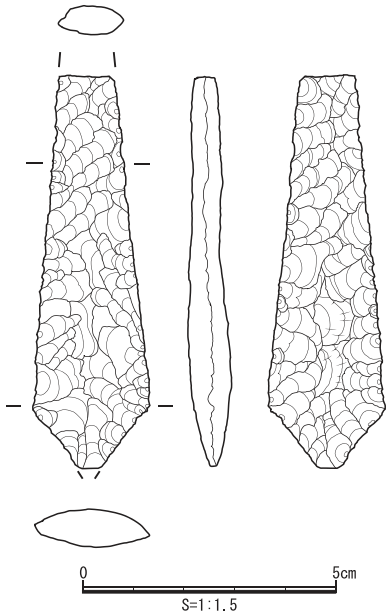

図３　S02040 出土有舌尖頭器

調整剥離　石器表面は全体的に磨滅・風化が進行し、剥離の陵線がはっきりとしない部分もある。表面・裏面ともに素材を調整する際に生じた剥離面を中央付近に残している。表面の調整剥離は、右側縁で剥離方向の乱れがあるものの、概ね右肩上がりの浅く長い樋状剥離を施す。基部の調整は左側が粗く右側が丁寧である。裏面の調整剥離は、右肩上がりの浅く長い樋状剥離を規則的に施す。基部の調整は左右ともに丁寧である。全体的な調整剥離の傾向として、左側縁の剥離が右側縁の剥離を大きく切る点をあげることができる。石器表面の大部分に丁寧な調整剥離を施しているため、素材の形状を判断することはできなかった。

石材の観察　観察は肉眼によった。色調の記載は標準土色帳による(1)。基質の色調は明赤灰色(2.5YR7/1)で、灰赤色(10R6/2)の帯状の構造が認められる。石材の中には0.5 ～ 1.5㎜の暗赤色(10R3/4)の透明な鉱物、0.5 ～ 2㎜の灰白色(10YR8/2)の不透明な鉱物がまばらに認められる。

4. 地名表の作成(表1)

先述したとおり滋賀県出土の有舌尖頭器は、過去に数回の集成作業がおこなわれてきた。近年では鈴木康二氏(2002)や藤崎高志氏・柳本千鶴氏(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2008)、鈴木忠司氏・鈴木康二氏によるもの(鈴木忠・鈴木康2010)がある。これらの地名表に若干の補足と近年の出土資料を加え地名表を作成した(表1)。いずれも当該期の遺構に伴わない遊離資料である。なお、過去に有舌尖頭器として集成されている資料のなかで、小型で有茎石鏃と区別することが困難な資料については集成から除外した。今回の集成作業の結果、滋賀県内からは松原内湖遺跡出土資料を加え、37遺跡から40点の有舌尖頭器の出土を確認しえた。

5. 利用石材に関する検討

従来の認識　近年、近畿・東海などの各地域での有舌尖頭器の集成作業をおこなう中で、サヌカイトやチャートなどといった、広範囲の分布域を示す石材の他に、在地石材と呼ばれる多様な石材の利用実態も明らかになりつつある(西口1991、川合2002a、鈴木2002、田部2002)。それらの結果から、石材別の分布傾向は地質に大きく左右されていることがわかっている。サヌカイトは二上山を中心に同心円状に広く分布し、チャートは古生層・中生層に沿うように広く分布する。在地石材と呼ばれる多様な石材はそれらの大きな分布域の中に点在するように小さな分布圏をつくる。さらに、製作者・使用者の嗜好や人・石材の移動なども反映され、地域別の組成がかたちづくられたと推定されている。

問題の所在　地域の石材組成を把握することは、草創期の生業活動の内容や人・物の移動を知るうえで重要な基礎的作業のひとつである。そこで、本稿では補足資料と新出資料を加えたため、再度滋賀県の石材の組成を確認する。また、基部形態にも地域差が認められており(川合2002)、こちらも地域の特徴を示す有効な指標であると考えられる。

検討の方法　そこで本稿では、表1に石材の種類(2)と基部形態の分類結果を属性として加えた。分類法は川合剛氏が用いた方法(3)を採用した。分類の概念図は図４に示す。この地名表をもとに石材別の分布図を作成した(図5)。図５を用いて有舌尖頭器の分布傾向、石材の組成および石材別の分布傾向、形態別の組成を検討した。

分布傾向(図5)　分布は滋賀県東部から南部に偏在する。集中部は４ヶ所認められた。県東部の平野から山地の１群、県南東部の平野と丘陵の２群、県南東部の山地の３群、県南部湖岸付近と瀬田川上流部の４群である。なお、県西部では1点のみの出土であるが5群とした。松原内湖遺跡出土の資料は１群に属することになる。

石材の組成と石材別の分布傾向(図5)　全体の石材の組成はチャート47.5％、サヌカイト35％、凝灰岩系2.5％、不明15％であった。チャートとサヌカイトで全体の82.5％と大半を占めた。分布の集中が認められたことから、集中部別にその割合をみると、第１群ではチャートが主体で凝灰岩系をわずかに含み、第２・３群ではチャートを主体としながら少量のサヌカイトを含み、第４群ではサヌカイトが主体となりわずかにチャートを含んだ。５群ではチャートのみで詳細は不明であった。分布の集中別に利用石材の組成に違いが認められた。県北東部ではチャートが多く、南にいくにしたがいサヌカイトが増加する傾向があった。

基部形態別の組成(図6)　全体の組成は、形態Aが10％、形態Bが47.5％、形態Cが15％、形態Dが2.5％、不明が25％であった。集中部別にその割合をみると１群では形態A･B･Cは等量であった。２群では形態A・B・Cがあり、形態Bが卓越する。３群では形態B・Cのみであった。４群では形態A・B・C・Dと多様性が高く、形態Bが卓越する。５群は形態Bのみで詳細は不明であった。各群で組成に違いが認められたが、顕著な傾向は認められなかった。松原内湖遺跡出土資料は逆刺が不明瞭で、基部が逆三角形の形態Aに属するものである。

検討の結果　新たに資料を追加・補足して作成した地名表から利用石材を検討した結果、サヌカイトとチャートの利用が多いことがわかった。この傾向は鈴木氏により指摘されており(鈴木2002)、その指摘を追認することになった。また、県南部ではサヌカイト、南東部ではチャートの利用が多いことが指摘されている(田部2002)。この傾向にも変化はなかった。これらは、西口氏が指摘するように(西口1991)、石材産地との距離に関係する分布傾向といえる。滋賀県の石材利用の特徴はサヌカイトとチャートが相半ばし、大半を占める点にある。集中別の組成の差も産地から

表１　滋賀県出土の有舌尖頭器

番号	遺跡名	所在地	サヌカイト	チャート	凝灰岩系	不明	分類	文献
1	北小松遺跡	大津市北小松		1			B	34
2	真野城遺跡	大津市真野６丁目	1				不明	35
3	大通寺／大通寺２遺跡	大津市滋賀里３丁目・２丁目ほか	1				B	23
4			1				C	
5	太鼓塚遺跡	大津市滋賀里１丁目・高砂町	1				B	4
6	大谷遺跡	大津市滋賀里町２丁目・３丁目	1				B	6
7	大谷南遺跡	大津市滋賀里町２丁目・３丁目				1	B	5
8	関津遺跡	大津市関津５丁目		1			B	24
9			1				B	
10	田上山遺跡	大津市田上里町滝ヶ谷	1				B	32・35
11	瀬田川水底	大津市瀬田川水底				1	B	30・35
12	唐橋遺跡	大津市瀬田２丁目	1				A	20
13	大山遺跡	大津市三大寺				1	不明	18・25
14	北萱遺跡	草津市御倉町	1				B	29
15	南平１号墳	栗東市川辺	1				D	14
16	幕山	甲南町新治小字幕山地先		1			C	13
17	野上野遺跡	甲賀市土山町野上野		1			B	
18	薬王寺溜遺跡	蒲生郡日野町西大路	1				C	32・40
19	風呂流遺跡	蒲生郡日野町寺尻・小井口		1			C	22
20	北代遺跡	蒲生郡日野町上野田北代		1			B	41
21	大塚城遺跡	蒲生町（東近江市）				1	不明	34
22	山面遺跡	竜王町大字山面字川原 883 番地他		1			B	42
23	高塚遺跡	蒲生郡竜王町山面（字高塚）	1				A	32・35
24				1			B	
25	九里氏館遺跡	近江八幡市西本郷町		1			不明	35
26	里ノ内遺跡	近江八幡市鷹飼町		1			不明	35
27	吉ヶ藪遺跡	近江八幡市武佐町・長光寺町		1			C	34
28	下羽田遺跡	東近江市下羽田町	1				A	43
29	浄土屋敷遺跡	東近江市上平木町		1			B	26
30	蔵ノ町遺跡	近江八幡市上田町		1			B	19
31	高木遺跡、後川遺跡	近江八幡市西庄町・長田町		1			基部欠損	21
32	安土弁天島遺跡	近江八幡市安土町下豊浦		1			B	34
33	正楽寺遺跡	東近江市神郷町・種町	1				B	39
34	元持遺跡	愛荘町元持		1			不明	34
35	六反田遺跡	彦根市宮田町		1			C	28
36	松原内湖遺跡	彦根市松原町			1		A	本稿
37	高溝遺跡	米原市高溝・顔戸		1			不明	3
38	大乾遺跡	米原市上多良		1			B	34
39	狐塚遺跡	米原市高溝				1	舌部欠損	2
40	法勝寺遺跡	米原市高溝				1	不明	34

* 鈴木（2002）、藤崎・柳本（2008）、鈴木忠・鈴木康（2010）をもとに、一部加筆修正して作成。
* 文献番号は、文末の文献一覧の番号に対応。

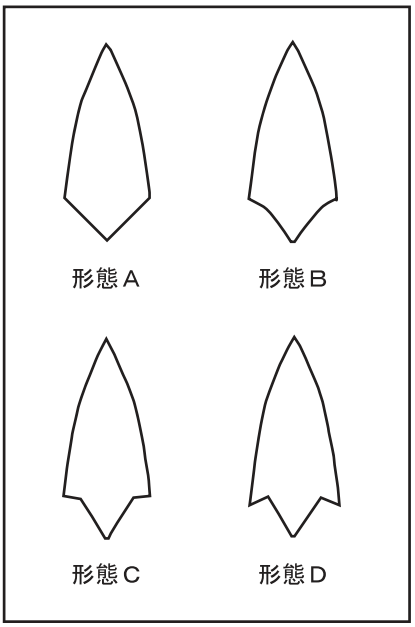

図４　基部形態による分類

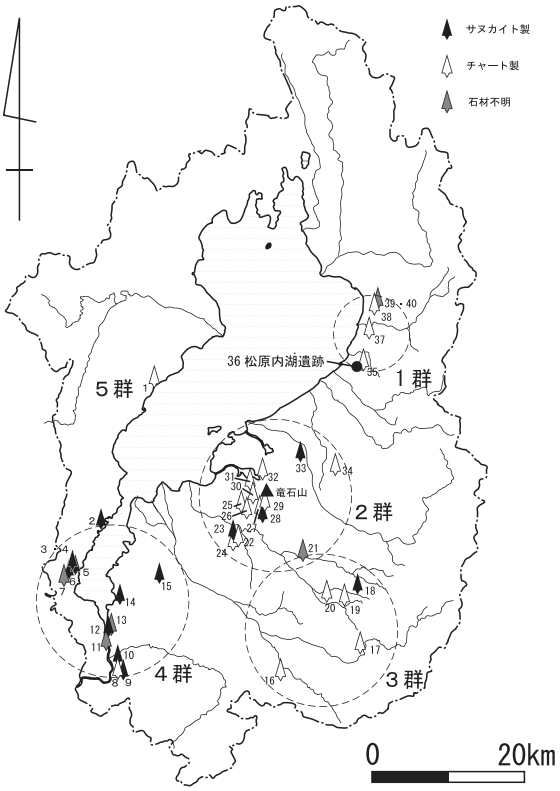

図５　石材別の分布

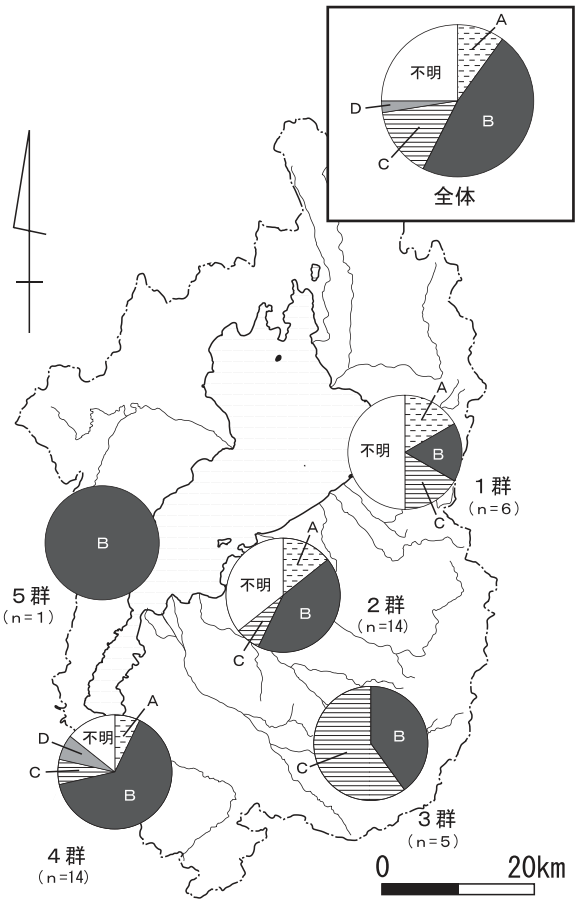

図６　基部形態別の割合

表２　凝灰岩系の石材で製作された有舌尖頭器

番号	遺跡名	所在地	石材	分類	文献
1	高田垣外古墳群下層遺跡	奈良県	酸性凝灰岩	C	12
2	萩平遺跡	愛知県新城市川路字萩平	凝灰岩	A・B	1・10
3	上重原	愛知県知立市上重原町	溶結凝灰岩	A	1・10
4	比留輪原遺跡	愛知県渥美郡田原町大字野田字西ひるわ・東ひるわ	溶結凝灰岩	B	1・10
5	長根遺跡(5)	岐阜県	凝灰岩	先端・基部欠損	8
6	次郎六郎遺跡	三重県志摩郡大王町船越字次郎六郎	凝灰岩	B	7

＊奥他（2002）・春日井（2002）・川合（2002b）・久保（2002）をもとに作成
＊文献番号は、文末の文献一覧の番号に対応。

の距離に関係していると考えられる。以上のような石材組成の特徴をふまえると、松原内湖遺跡で出土した凝灰岩系の石材は稀な石材利用例といえる。したがって、本資料を評価する上で石材の産地は重要な鍵となる(5)。この凝灰岩系の石材の産地はどこに求められるだろうか。現在のところ、以下の２つの可能性が考えられる。

①搬入品の可能性　近隣の地域で凝灰岩系の石材を利用した有舌尖頭器は、奈良県・愛知県・岐阜県・三重県で報告がある(表2)。石材は凝灰岩・酸性凝灰岩・溶結凝灰岩と記載されている。７点の出土例の内訳は愛知県4点、岐阜県１点、三重県１点、奈良県１点である。愛知県で最も多い。さらに、基部形態の分類では形態Aが２点、形態Bが３点、形態Cが１点と、形態A・Bが多い。形態Cは奈良県のみであり、他は東海地方である。川合剛氏は基部形態別の分布傾向を検討し、その結果形態Aは愛知県・岐阜県・福井県で多く、形態Dは大阪府・岐阜県・奈良県で多く、形態B・Cは各地に分布しているとした(川合2002)。先述したとおり本資料は形態Aに分類される。これらのことから、本資料は福井県や東海地方から搬入された可能性がある。

②在地石材の利用　県内には凝灰岩もしくは溶結凝灰岩を産する地質がある。凝灰岩は中生・古生層に含まれる輝緑凝灰岩、中生代末の火山活動により形成された溶結凝灰岩である(滋賀県1981・1982・1986)。溶結凝灰岩には数種あり、代表的なものは湖東流紋岩と呼ばれる萱原溶結凝灰岩である。そのほかにも近江八幡市安土町竜石山(図5に▲の凡例で表示)で産する瓶割山溶結凝灰岩・腰越溶結凝灰岩・安土溶結凝灰岩などがある(滋賀県高等学校理科教育研究会地学部会編1980)。したがって、本資料は県内の石材を利用して製作された可能性もある。そのため、竜石山の踏査をおこなった。その結果、安土溶結凝灰岩は風化した基質の色調が本資料の基質の色調と類似することがわかった。しかしながら、含まれる鉱物組成や岩片の組成や量に違いが認められた。溶結凝灰岩を産する地質は、県東部に点在しており、さらなる踏査が必要である。

6. 今後の課題

以上の検討の結果、本資料の石材産地には２つの可能性が考えられた。本稿では資料紹介と可能性の提示にとどまった。今後、他地域の類似する石材製の有舌尖頭器について形態(6)や製作技法などの比較検討をおこないたい。また、県内外の石材産地の踏査をおこなって石材の由来を求め、滋賀県における石材利用の実態を明らかにしていきたい(7)。

謝辞

本稿執筆に当たり以下の皆様にご教示・ご指導いただきました。記してお礼申し上げます。

伊藤正人、岩橋隆浩、大崎康文、川合剛、貴島嗣夫、小島孝修、鈴木康二、辻川哲朗、中村健二、濱修、細川修平、松室孝樹、水野裕之(50音順、敬称略)

註

(1)　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修　『新版標準土色帖2010年版』を使用した。

(2)　石材の記載は実見による確認もしくは文献の記載によった。利用石材の記載がないもの、詳細が不詳なものは不明とした。

(3)　基部形態の分類は西口陽一氏もおこなっている。氏の分類では６形態に分類している(西口1991)。本資料については当初から搬入品の可能性を考えていた。そのため、近畿二府四県、東海三県、福井県の広域にわたる資料をもとに、基部形態の地域性を検討した川合剛士氏の結果と比較する必要があった。そのため川合氏が用いた分類基準を採用した。形態の確認は実見または文献に掲載された実測図・写真によった。基部・舌部が欠損し分類できないものは、基部欠損・舌部欠損と記載した。詳細が不詳なものは、不明とした。

(4)　尖頭器として集成されているが、先端と基部を欠損しているため有舌尖頭器の可能性もあると考えた。

(5)　川合剛氏は遠隔地石材・異種石材が出土した場合、そのありかたについて詳細に検討する必要性を指摘している。愛知県の品野西遺跡ではチャート・珪質頁岩が多用されているが、安山岩製の有舌尖頭器が認められる。兵庫県国領遺跡ではチャートが多用されているが、出土した５点の有舌尖頭器の全てがサヌカイト製である(川合2002)。本資料の例は、これらの例と類似すると考えられる。

(6)　形態については水野裕之氏･川合剛氏から、愛知県の資料の他、福井県鳴鹿山鹿遺跡出土の資料にも類似する点をご教示いただいた。鳴鹿山鹿遺跡出土資料では形態Aの資料が多数を占める。石材構成は、安山岩・流紋岩・砂岩・チャートなど多様な石材が利用されている(田中・二村2002)。

(7)　石材については、水野裕之氏より流紋岩の、川合剛氏からは溶結凝灰岩の可能性がある点をご教示いただいた。今後の調査の参考としたい。

文献(著者名・刊行機関名50音順、刊行年順)

１．愛知県史編さん委員会(2002)『愛知県史　資料編１考古１旧石器・縄文』愛知県
２．近江町史編さん委員会(1989)『近江町史』近江町役場
３．近江町教育委員会(1990)『高溝遺跡』(近江町文化財調査報告書第4集)
４．大津市教育委員会(1992)『太鼓塚遺跡発掘調査報告書』(大津市埋蔵文化財調査報告書(19))
５．大津市教育委員会(1994a)『大谷南遺跡発掘調査報告書』(大津市埋蔵文化財調査報告書(24))
６．大津市教育委員会(1994b)『大谷遺跡発掘調査報告書』(大津市埋蔵文化財発掘調査報告書(25))

7．奥義次・田村陽一・松葉和也 (2002)「府県別集成　三重県」『第4回関西縄文文化研究会　縄文時代の石器　－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会
8．春日井恒(2002)「府県別集成　岐阜県」『第4回関西縄文文化研究会　縄文時代の石器　－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会
9．川合剛(2002a)「近畿・東海地方の有舌尖頭器」『第4回関西縄文文化研究会　縄文時代の石器　－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会
10. 川合剛(2002b)「府県別集成　愛知県」『第4回関西縄文文化研究会　縄文時代の石器　－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会
11. 関西縄文文化研究会(2002)『第4回関西縄文文化研究会　縄文時代の石器　－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会
12. 久保邦江(2002)「府県別集成奈良県」『第4回関西縄文文化研究会　縄文時代の石器　－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会
13. 甲賀市史編さん委員会(2007)『甲賀市史　第1巻古代の甲賀』甲賀市
14. 財団法人栗東市体育協会文化財調査課(2013)『栗東発掘再発見vol.3　縄文時代草創期・栗東最古の考古遺物有茎尖頭器約14,000年前』
15. 滋賀県(1981)「土地分類基本調査」『彦根西部』
16. 滋賀県(1982)「土地分類基本調査」『近江八幡』
17. 滋賀県(1986)「土地分類基本調査」『彦根東部』
18. 滋賀県教育委員会(2011)『平成22年度　滋賀県遺跡地図』
19. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1987)「Ⅰ近江八幡市蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ-4』
20. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1992)『唐橋遺跡』
21. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1994)『高木・後川遺跡』
22. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1995a)『浄土屋敷遺跡・野田代遺跡・風呂流遺跡』
23. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1995b)『大通寺古墳群』
24. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2007)『関津遺跡Ⅰ』
25. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2008)『関津遺跡』
26. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2011a)『浄土屋敷Ⅰ』
27. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2011b)『松原内湖遺跡Ⅱ』
28. 滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2013a)『六反田遺跡Ⅱ』
29. 滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2013b)「琵琶湖東南部草津川地域の湖底・湖岸遺跡」『北山田湖底遺跡・矢橋湖底遺跡・矢橋港跡・北萱遺跡』
30. 滋賀縣栗太郡役所(1926)『栗太郡志』
31. 滋賀県高等学校理科教育研究会地学部会編(1980)『地学のガイドシリーズ12　滋賀県地学のガイド　－滋賀県の地質とそのおいたち－』株式会社コロナ社
32. 四出井晴子(1970)「滋賀県の有舌尖頭器他」『古代文化　XXⅡ-3』財團法人古代學協會
33. 進藤武(1995)「滋賀県の石槍」『滋賀考古　第13号』滋賀考古学研究会
34. 鈴木康二(2002)「滋賀県の縄文時代草創期・早期の遺跡と石器の概観」『第4回関西縄文文化研究会　縄文時代の石器　－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会
35. 鈴木忠司・鈴木康二(2010)「滋賀県」『日本列島の旧石器時代遺跡　－日本旧石器(先土器・岩宿)時代遺跡のデータベース－』日本旧石器学会
36. 田部剛士(2002)「縄文時代草創期・早期の石材利用」『第4回関西縄文文化研究会　縄文時代の石器　－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会
37. 田中裕二・二村陽子(2002)「府県別集成　福井県」『第4回関西縄文文化研究会　縄文時代の石器　－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会
38. 西口陽一(1991)「近畿・有舌尖頭器の研究」『考古学研究第38巻第1号』考古学研究会
39. 能登川町教育委員会(1996)『正楽寺遺跡(5次調査)』(能登川町埋蔵文化財調査報告書第40集)
40. 日野町教育委員会(1989)『薬王子溜遺跡』(日野町内遺跡詳細分布調査報告書昭和63年度版)
41. 日野町教育委員会(2005)『播沢遺跡・野辺遺跡・松尾遺跡・北代遺跡』(日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第22集)
42. 竜王町教育委員会(2005)「埋蔵文化財確認調査(山面地先)」『竜王町内遺跡発掘調査報告書平成13年度～平成15年度』
43. 八日市市教育委員会(1989)『下羽田遺跡発掘調査報告書』(八日市市文化財調査報告(9))

挿図典拠

図１　国土地理院数値地図25000「彦根東部」をベースマップとし、遺跡番号・範囲は『平成22年度　滋賀県遺跡地図』にもとづき加藤作成。滋賀県の地図は辻川氏提供による。

図２　加藤がトレースし作図。

図３　加藤が実測・トレースし作図。

図４　川合2002をトレースし加藤作成。

図５　辻川氏提供の図をベースとし、進藤1995、鈴木忠・鈴木康2010をもとに加藤作成。

図６　辻川氏提供の図をベースとし、加藤作成。

表典拠

表１　滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2008と鈴木忠・鈴木康2010をもとに加藤作成。

表２　奥他2002・春日井2002・久保2002・川合2002bをもとに加藤作成。

【編集後記】

本号は、縄文時代から近代までの、埋蔵文化財やその資料管理、建造物など、文化財にかかわる日頃の研究成果の集成、論考の再評価、等となっており、幅広い時期と事物を対象とした豊富な内容となりました。

本書が、文化財の保護と調査・研究の進展のため、広く活用されることを願います。（編集担当）

平成26年（2014年）３月31日

紀　要　第27号

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
520-2122　滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732-2
(TEL) 077-548-9780 ／ (FAX)077-543-1525
e-mail: mail@shiga-bunkazai.jp
http://www.shiga-bunkazai.jp/
印刷・製本：マルキ印刷株式会社